

■ 編集だより

編集後記

今年の夏に日本の屋久島に行った。世界遺産に日本で初めて認定された場所である。海もきれいで、景色がよく、静かな場所であった。屋久島で有名なのはご存じのように屋久杉であり、樹齢1000年を超えたものと呼んでいるそうだ。屋久杉の中で樹齢が数千年とも言われている縄文杉がこの島のシンボルとなっている。2007年10月1日、屋久町と上屋久町が合併して屋久島町が発足したが、2005年国勢調査によると、2町の人口の合計は13,761である。多くの人が外から屋久杉を一目見ようと訪れる。ピーク時には一日1,800人近くにのぼるらしい。こじんまりだが小奇麗にしている旅館に泊まり、郷土料理を堪能し、私も縄文杉を目指した。地元ガイドの案内で、ゆっくりとであるが確実にトロッコ道を3時間余り歩く。途中ゴミもなくさすが世界遺産に指定されただけのことがあるなど感心しながら一步一步先に進んだ。ここに訪れる人々は、自然や霊的な何かを求めていることが少なくない。女性一人で訪れる光景もよく見られる。今はやりの無駄をなくし、自然をそのままにするエコの考え方は旅館に行けばよくわかる。そんな中で、この数年訪れる人が急増して、そのマナーの悪さに閉口しているとのこと、特に避難小屋周囲のトイレ問題は深刻らしい。屋久杉の根が痛まないように尾瀬のようにルートが決められているが、そこを外れて勝手気ままにちらかり放題だそうだ。このままだと溪流の水も飲めなくなると危惧している。今までひっそりとした鹿児島県の1つの離島であったが、今や世界遺産めぐりと称して脚光を浴び、その弊害が出ている。いいものを見たい気持ちは、人間の心理として仕方がないが、行き過ぎは問題である。

さて話は変わるが、社会経済に限らず、医学の領域の国際化に伴い研究発表の場も同様に日本語ではなく英語で行われるのが常識になってきた。精神医学に関しても同様であり、皆が争って英文誌への投稿を目指している。英語がいまや世界の共通語に近い役割を果たしている以上これは当然の成り行きである。皆が投稿して優秀な論文が掲載されればそれを読むために読者が関心を持ち、インパクトファクターが上がり、更に投稿が増えるという仕組みである。群集心理のように良いものに群がっていくのである。しかし、精神科領域では、人間を扱うものである。つまり人間はその人が暮らしている社会、文化に大きく影響を受けている。英語では表せない、日本独自の何かがありとあると思っている。その意味では、英文誌のみにとらわれず、和文雑誌の良さを再確認してもらいたいものである。先ほどの縄文杉のように大ブームになってそのまわりに幾本もある立派な屋久杉の良さを失いかないようにしなければならない。当雑誌は長生きできるような雑誌作りを目指していきたいものである。

忽滑谷和孝